

Nihonbashi Opera Tokyo 2024

LEONORE

Oper in drei Akten
von

Ludwig van Beethoven



Urfassung von Fidelio in 1805

First performance in Asia



Sunday, October 13, 2024 Ginza Blossom Hall Tokyo



福田祥子

日本橋オペラ研究会(中央区社会教育団体)会長

一般社団法人日本橋オペラ研究会理事長

ご挨拶

本日は、日本橋オペラ 2024 歌劇「レオノーレ」にお越し頂きありがとうございます。小学校の教科書で見た、あの楽聖ベートーヴェンのオペラを日本初演できるなんて、本当に夢のようです。これまでレオノーレは 1805 年ウィーン初演時の不評から、大幅に書き直しを余儀なくされた、歌劇「フィデリオ」の初稿と言われてきました。この二つのオペラの外見上の違いはレオノーレが 3 幕なのに対してフィデリオでは数曲がカットされ、2 幕になっています。しかし外見以上に異なるのが、オペラが終わった後に見える景色です。フィデリオが、ハリウッド映画を見終わったような気分になる一方、レオノーレでは、なにか素朴な、ベートーヴェンの哲学を感じる作品となっています。また私は、2 回の休憩が入るレオノーレの方が、むしろ楽にオペラを鑑賞できるかと思います。解説とあらすじは、後ろのページをご覧ください。

今更ですが、ベートーヴェンは、それまで宮廷や教会のためにあった音楽を、庶民のために開放しました。自身は難聴により、音楽家として絶望的な境遇で、死を覚悟する遺書さえ書きました。しかし自分は音楽という芸術により生かされていることに気づき、それを乗り越え、自分より悩んでいる人々のために、もっと素晴らしい曲を作曲しよう！と、「運命」や「第九」をはじめとする数々の不朽の名作が生まれました。その高い精神性により、人々が「楽聖」という崇高な称号を与えたのでした。

偉大な芸術の本質は、過去と現在を結びつけ、さらに未来に繋がる普遍性です。レオノーレはフランス革命から現在に至る、人類の多くの過ちを思い起こさせ、かつ今も変わらぬ人間の欲望、抑圧と開放、自由と平和の大切さを教えてくれます。

本日の公演のためにウィーンから、当会の顧問でもあり、ベートーヴェンの権威として著名なシュテファン・メラ教授が来日して、ピアノで共演します。同氏は当会常任指揮者の佐々木氏のザルツブルク時代の同級生で、私もウィーンで共演しています。見た目も心もベートーヴェンの申し子です！

本日の公演がきっかけとなり、レオノーレの再評価が進み、ベートーヴェンのオペラがもう一つ増えたらステキなことだと思います。何十年か後「私はあのレオノーレの日本初演を観た！」と言って頂けるような公演にしたいと願っています。

なお、当会で編曲・校正した編曲譜・ヴォーカル譜は、IMSLP(ペトルッチ楽譜ライブラリー)で公開します。また、次回の日本橋オペラの公演は、来年5月3日(土)王子ホールでプッチーニの「トスカ」を、セミステージでの上演を予定しています。

一般社団法人日本橋オペラ研究会顧問

馬淵明子氏：美術史家、日本女子大学名誉教授、ジャポニズム学会会長。これまで、国立西洋美術館館長、独立行政法人国立美術館理事長、文化審議会委員、日本女子サッカーリーグ理事長などを歴任

田隅靖子氏：ピアニスト、京都市立芸術大学名誉教授、元京都コンサートホール館長、京都府文化賞特別功労賞受賞

高松富二子氏：国際ソロプチミスト宝塚会長、高松コンストラクショングループ取締役名誉会長
高松孝之氏夫人

岡田恭芳氏：医師、医学博士、医療法人愛育会理事長、聖マリアンナ医科大学臨床教授

シュテファン・メラー氏：(下記参照)

木村 啓氏：弁護士、ニューヨーク州弁護士、弁護士法人第一法律事務所パートナー



福田祥子 (Shoko Fukuda) 演出・ソプラノ／レオノーレ(フィデリオ) 役

大阪音楽大学ピアノ科卒業。大阪芸術大学大学院声楽専攻修了。東京二期会オペラ研修所本科首席修了、優秀賞受賞。これまで、神々の黄昏、トリスタンとイゾルデ、アイーダ、椿姫、オテッロ、蝶々夫人、トゥーランドット、トスカ、オネーギンなど30作品以上に主役級の配役で出演。『圧倒的にして鮮烈な歌声と存在感。生まれながらのブリュンヒルデ』(音楽現代)『輝かしい高音』(音楽の友)と批評を受ける。本格的ワグナーソプラノでありながら、ヴェルディ、プッチーニといったイタリアオペラまで、広範囲のレパートリーを有する、日本人としては稀有の存在。ウィーンとバイエルンの両国立歌劇場で研修を受け、スタラ・ザゴラ国立歌劇場(ブルガリア)などに度々出演、絶賛されている。また、世界中でリサイタルやオーケストラと共演をしている。近年では、日本橋オペラ「日本初演のオペラ」シリーズに、主役・演出家・製作者として参画、学術的にも高く評価されている。さらに国際声楽コンクールの審査員、また「お母さんコーラス全国大会2024」の選考委員をつとめるなど、活躍の場を広げている。東京二期会、関西二期会各会員。一般社団法人日本橋オペラ研究会理事長。



佐々木 修 (Osamu Sasaki)／指揮・編曲

青森県出身。武蔵野音楽大学卒業。オーストリア政府奨学生。カラヤン、チェリビダクケなどの巨匠に師事。モーツァルトウム音楽大学指揮科最優秀卒業。同大学講師・常任指揮者をつとめる。1979年カラヤン国際指揮者コンクール入賞。1982年と83年東洋人として初めてザルツブルク国際モーツァルト週間で指揮「心から自然でしなやか、新鮮なモーツァルト指揮者」と絶賛され、国際モーツァルトウム財団よりパウムガルトナーメダルを授与される。1984年ベルリン・ドイツ響を指揮してドイツデビュー。帰国後、日本各地のオーケストラや合唱を指揮。またNHK-FMのパーソナリティ、タモリの音楽は世界だ!等の音楽番組制作、映像・CD・WEB制作、AI特許、女性のためのモバイルコンテンツ「ルナルナ」の創設、開発に携わるなど、マルチなタレントで活躍。(株)マエストロ代表取締役。日本橋オペラ常任指揮者。一社)日本橋オペラ研究会理事。



シュテファン・メラー (Stephan Möller)／ピアノ

1955年ドイツ・ハンブルク生れ。モーツァルトウム音楽大学ピアノ科と指揮科卒業。ザルツブルク音楽祭で、カラヤンなど世界的な指揮者のアシスタントをつとめる。1985年ベートーヴェン国際ピアノコンクール(ウィーン)第3位入賞。1990年から30年間、ウィーン国立音楽大学教授をつとめる。ベートーヴェン生誕250周年記念としてベートーヴェンの全ソナタ32曲を世界32都市で演奏するワールドツアー「ベートーヴェン32×32」を行う。現在はウィーン国際ピアニスト協会とVIPアカデミーフェスティバルの会長、さらにウィーン・ワグナー音楽院の教授として、世界中で演奏活動、マスタークラスの指導者として多忙な日々を過ごしている。

村上敏明 (Toshiaki Murakami) テノール／フロレスタン役



国立音楽大学声楽学科卒業。文化庁在外研修員他の奨学金を得て、2001年より2007年までイタリア・ボローニャに留学。2002年に、オルヴィエート・マンチネッリ劇場にて「リゴレット」マントヴァ公爵でヨーロッパデビュー。藤原歌劇団「ラ・ボエーム」「ルチア」「仮面舞踏会」、新国立劇場「椿姫」「蝶々夫人」「愛の妙薬」「カルメン」等に主演し、常に最大級の賛辞を受けている。第9回マダムバタフライ世界コンクール優勝のほか、15の国際声楽コンクールで優勝または上位入賞。2004年には、第40回日伊声楽コンクール第1位、第35回イタリア声楽コンクール・シエナ大賞と、国内2大タイトルを獲得し話題を集める。2012年より、NHK ニューイヤーオペラコンサートに12年連続出演。平成16年度五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。八王子コミュニティーオペラ芸術監督。勝浦歌劇団総監督。藤原歌劇団団員。人気実力ともに日本を代表するテノール歌手として、活躍の幅を広げている。

ジョン・ハオ／鍾皓 (Zhong Hao) バス／ロッコ役



中国沈陽出身。東京芸術大学大学院オペラ専攻修士課程終了。芸大創立120周年記念オペラ公演「ラ・ボエーム」のコッリーネ役で日本におけるオペラデビュー。これまでドン・カルロ、セビリアの理髪師、フィガロの結婚、魔笛、トゥーランドット、アイダ、マクベス、トスカ、リゴレットなど重要な役を演じた。指揮者の井上道義からは「どこに出しても恥ずかしくない本当のバスの声」と評された。二期会創立60周年記念ナブッコ（ザッカーリア役）に出演、高く評価された。第38回イタリア声楽コンクール・シエナ部門第1位、シエナ大賞受賞。2008年首相官邸で開催された中国胡錦濤国家主席を迎えての晩餐会で日本と中国の歌を披露。二期会会員。

寺田功治 (Koji Terada) バリトン／ドン・ピツァロ役



東京音楽大学声楽演奏家コース卒業。英国ギルドホール音楽演劇学校から奨学金を受け大学院修士課程オペラコース修了。ネザールランド・オペラ・スタジオ研修生修了。これまでに小澤征爾音楽塾プロジェクト、及びサイトウ・キネン・フェスティバルにて小澤征爾氏と共演。アイルランド・ウェックスフォード・フェスティバル・オペラではこれまでに数々の公演に出演し、ヨーロッパ初上演になったケヴィン・プッツ「サイレント・ナイト」英国中佐役で出演。第11回 コンセール・マロニエ21 第1位。第7回エレナ・オブラスツォワ国際声楽コンクール 第3位。第85回 日本音楽コンクール声楽部門 第2位。第37回 飯塚新人音楽コンクール第1位。

川ノ上 聡 (So Kawanoue) バス／ドン・フェルナンド役



鹿児島県出身。国立音楽大学声楽学科卒業。二期会オペラ研修所修了。平野忠彦氏に師事。これまでオペラでは『フィガロの結婚』フィガロ役、『コジ・ファン・トゥッテ』グリエルモ役、『こうもり』フランク役などに出演。またミュージカルにも出演している。喜劇から悲劇まで役を細かく演じる歌声と芝居に好評を得ている。

森井美貴 (Miki Morii) ソプラノ／マルツェリーネ役



大阪音楽大学卒業、同大学専攻科修了。第34回飯塚新人音楽コンクール第一位、文部科学大臣賞、海外研修費を授与シタリア・ミラノに短期留学、研鑽を積む。第47回なにわ芸術祭新人賞、第17回KOBE国際音楽コンクール声楽C部門最優秀賞、第13回大阪国際音楽コンクール第三位、第28回宝塚ベガ音楽コンクール宝塚演奏家連盟賞、第26回摂津音楽祭リトルカメリアコンクール奨励賞、等多数受賞。大学在学中に佐川吉男音楽賞奨励賞を受賞した「椿姫」でオペラデビュー後、「ラ・ボエーム」ミミ、「道化師」ネッダ、「メリー・ウィドウ」ハンナ、などを演じオペラを中心に活動を広げる。NHK-FM「リサイタル・ノヴァ」に出演。関西二期会準会員。

金山京介 (Kiyosuke Kanayama) テノール／ヤキーノ役



島根県出身。国立音楽大学首席卒業。卒業時に矢田部賞受賞。東京藝術大学大学院修了。15年東京二期会オペラ『魔笛』（宮本亞門演出）タミーノ役にて二期会オペラデビュー。以後、日生劇場および東京芸術劇場『ドン・ジョヴァンニ』ドン・オッターヴィオ、日生劇場『セヴィリアの理髪師』アルマヴィーヴァ伯爵、『後宮からの逃走』ベルモンテ、二期会『メリー・ウィドウ』カミーユ、『こうもり』アルフレード、東京・春・音楽祭『トリスタンとイゾルデ』若い水夫の声、新国立劇場『椿姫』ガストン子爵役等、多数のプロダクションに出演。「第九」「メサイア」「天地創造」、モーツァルト「レクイエム」、ロッシーニ「スターバト・マーテル」等のソロも務める。二期会会員。



沼田真由子 (Mayuko Numata) ソプラノ／アンサンブル

武蔵野音楽大学、同大学院修了。オペラ『ホフマン物語』（オランピア）、『魔笛』（パミーナ）、『カルメン』（ミカエラ）、『ロメオとジュリエット』（ジュリエット）他、宗教曲のソリスト、コンサート等に出演。「コール・プルニエ」、「子ども参加型オペラ・バンビーニ」講師。二期会BLOC“Liebeslieder”メンバー。二期会会員。



小川嘉世 (Kayo Ogawa) ソプラノ／アンサンブル

国立音楽大学声楽科卒業。コンセルヴァトアール尚美ディプロマ科、東京二期会研修所マスタークラス修了。これまでに国立音楽大学東京同調会、東京二期会、DGC・NGO国連クラシックライブ協会、文化庁支援事業コンサートに出演。オペラにも多く出演し自主企画公演なども開催している。ベートーヴェン「第九」などソロを務める。板橋区演奏会協会、東京室内歌劇場、東京二期会会員。



指出麻琴 (Makoto Sashide) ソプラノ／アンサンブル

国立音楽大学声楽専修卒業、歌曲ソリストコース修了、同大学院修士課程オペラコース修了。学部卒業時に卒業演奏会出演。大学院オペラ『皇帝ティートの慈悲』セルヴィリア役で出演。二期会オペラ研修所65期修了。二期会準会員。クラシックの演奏活動だけでなく、ラウンジシンガー、ボイストレーナーとしても活動している。



高橋みのり (Minori Takahashi) ソプラノ／アンサンブル

中央大学経済学部卒業。社会人を経て東邦音楽大学大学院、同大学ウィーンアカデミー修了。東京国際芸術協会および国際芸術連盟新人オーディション合格。第4回東京国際声楽コンクール愛好家部門第2位（1位なし）。多数のコンサートやオペラに出演。声楽を故白石敬子、武藤直美、片岡啓子、望月哲也各氏に師事。



窪 瑤子 (Yoko Kubo) メゾソプラノ／アンサンブル

日本大学芸術学部卒業。東京音楽大学大学院修了。第57期二期会オペラ研修所修了。スペイン音楽国際講習会にスペイン政府の奨学金を得て参加。第48回新潟県音楽コンクール声楽部門最優秀賞。山形交響楽団とソリストとして共演。劇団東俳、各音楽教室で後進の指導にあたる。二期会スペイン音楽研究会会員。二期会準会員。



古志祐華 (Yuka Koshi) メゾソプラノ／アンサンブル

お茶の水女子大学心理学コース卒業後、社会人を経て昭和音楽大学声楽学科卒業。現在声楽を青木素子氏に師事。これまでに演じた役は「フィガロの結婚」マルチェリーナ、「カヴァレリア・ルスティカーナ」サントウツツア、「仮面舞踏会」ウルリカ、「リゴレット」マッドレーナ等。「第九」アルトソリストも務める。



梅野杏珠 (Anju Umeno) メゾソプラノ／アンサンブル

17歳より声楽を始める。現在は桐朋学園大学4年に在籍。現在は学内での演奏会などを中心に活動中。また、早稲田大学 Seiren Musical Project にてミュージカルの舞台にも出演している。



源本かのん (Kanon Minamoto) メゾソプラノ／アンサンブル

東京都出身。桐朋学園大学音楽学部附属子供のための音楽教室にて12歳から声楽を始める。桐朋女子高等学校音楽科を卒業、現在桐朋学園大学音楽学部4年に在学中。



佐保佑弥 (Yuya Saho) テノール／囚人1役／アンサンブル

大分県出身。これまでにG. ドニゼッティ《愛の妙薬》ネモリーノ役、G.F. ヘンデル《メサイア》、L.v. ベートーヴェン《ミサ・ソレムニス》テノールソロを務める。また、劇団四季主催ミュージカル《ノートルダムの鐘》にクワイヤとして参加。新国立劇場合唱団コンサートメンバー。東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。



服部聖人 (Masato Hattori) バリトン／囚人2役／アンサンブル

声楽を佐藤泰弘、故日比啓子の諸氏に師事。これまでに「ラ・ボエム」アルチンドロ役「カルメン」モラレス役、「ウェルテル」アルベール役、「リゴレット」マルッコ役。またトアサマリ名義にて漫画作品や絵を制作。動画作品「漫画 de バロック音楽」では作画と演奏で参加し公開。洗足学園音楽大学 演奏補助要員。



中野智貴 (Tomoki Nakano) テノール / アンサンブル

東京音楽大学声楽演奏家コース卒業。同大学大学院オペラ研究領域修了。在学中、給費奨学生に選出。東京二期会オペラ研修所、第62期マスタークラス修了。修了時、優秀賞及び奨励賞受賞。東京音楽大学創立111周年記念公演「ボエム」ロドルフォ役を歌う。2019年イタリア、サンタ・チェチーリア音楽院サマーアカデミーに参加。「ボエム」ロドルフォ役他を歌い、ディプロマ取得。二期会会員。



町村 彰 (Akira Machimura) テノール / アンサンブル

東京大学大学院修士課程修了。永井宏氏に指揮法を、青木洋也、大山大輔、T. プファイファーの各氏に声楽を学ぶ。過去にJ.S. バッハ『マタイ受難曲』『クリスマス・オラトリオ』福音史家、W.A. モーツァルト『コジ・ファン・トゥッテ』ドン・アルフォンソ、『レクイエム』テノール/バスソリストなどを演奏。M-1 グランプリ 2021-2023 一回戦出場(敗退)。



種子島史時 (Fumitoki Tanegashima) テノール / アンサンブル

神奈川県出身。桐朋学園芸術短期大学音楽専攻声楽専修卒業。声楽を小野弘晴氏に師事。第32回全日本Jr. クラシックコンクール大学生の部全国大会入選。オペラでは「カルメン」(レメンダード)「ノルマ(フラヴィオ)」「仮面舞踏会(判事、召使)」「トゥーランドット(パン)」等に出演。



根岸一郎 (Ichiro Negishi) テノール / アンサンブル

武蔵野音楽大学声楽科及び早稲田大学文学部仏文専修卒業。ソルボンヌ大学比較文学修士。日仏声楽、フランス音楽、H. ソーゲ国際のコンクールに入賞。中世・ルネサンス音楽から現代作品まで幅広く活動し、フランス近代歌曲での評価はとくに詳しく高く日仏声楽コンクール審査員を務める。東京室内歌劇場、日本フォーレ協会 他会員。



田中 潤 (Jun Tanaka) バリトン / アンサンブル

長野県出身。愛知県立芸術大学声楽専攻卒業、同大学院修了。修了時に優秀学生賞受賞。第75回全日本学生音楽コンクール名古屋大会第1位、同全国大会入賞。『コジ・ファン・トゥッテ』グリエルモ役や、ベートーヴェン『第九』等のソロを務める。宮坂節子、末吉利行、森寿美、妻屋秀和の各氏に師事。



田尻大貴 (Hiroki Tajiri) バス / アンサンブル

東京藝術大学音楽学部声楽科バス専攻卒業。東京二期会オペラ研修所第64期本科修了。演奏会にて、「Cosi fan tutte」ドン・アルフォンソ役、「Don Giovanni」騎士長役などを務める。これまでに、声楽を南迪子、岩津整明、勝部太、永井和子、発声を田口昌範の各師に師事。



高橋悠貴 (Yuki Takahashi) バス / アンサンブル

やまと国際オペラ協会会員。2019年 桐朋学園大学音楽学部声楽専攻卒業。2024年1月21日にやまと国際オペラ協会主催『DON CARLO』に出演。同年5月5日に日本橋オペラ日本初演シリーズ4 歌劇『カヴァレリア・ルスティカーナ』×2に参加。

作品解説～演出ノート～あらすじ

歌劇「レオノーレ」は番号オペラの形式で作曲され、その間をドイツ語のセリフで繋がれています。今回の日本橋オペラの公演では、ドイツ語のセリフを最小限にとどめ、できるだけ音楽でスムーズに繋がります。演出は基本的に楽譜に指示されているト書き通りに進行します。すべてはお客様に、よりオペラを楽しんでいただけるための選択です。

【序曲レオノーレ第2番】 歌劇「レオノーレ」初演(1805年)に際して演奏された、長大な序曲が冒頭演奏される。同年作曲されたと言われている第1番の序曲はベートーヴェンの死後の1830年初演されている、第2番をブラッシュアップした第3番と、半分ほどに短縮されたフィデリオ序曲は頻繁に演奏されているので、それらとの差異は興味深い。

第1幕

スペインのセヴィリヤ近郊、そこの刑務所の地下牢には、政治犯のフロレスタンが幽閉されている。彼は刑務所長でもある、政敵のドン・ピツァロの不正を暴いたため、恨みを受けて監禁されてしまったのである。これを知っているのは、牢番のロッコだけで、フロレスターの妻レオノーレは、男装してフィデリオと名乗り、ロッコの部下として潜入している。そして折りあらば、夫を救出しようと時を窺っている。

【第1番-アリア】刑務所の敷地内にあるロッコの官舎、ロッコの娘のマルツェリーネは、最近ロッコの部下になった美青年のフィデリオに惹かれている。彼女は洗濯物を乾かしながら、フィデリオに対する燃えるような心をうたう。【第2番-二重唱】そこに門番のヤキーノが来て、彼女に結婚を迫る。マルツェリーネは以前、ヤキーノと付き合っていたが、今はフィデリオに心変わりしているで、彼の誘いに色好い返事は出来ない。《なお冒頭の2曲のアリアと二重唱は、歌劇「フィデリオ」では順番が入れ替わっている》そこにロッコが帰宅する。

【第3番-三重唱※】ロッコは部下のフィデリオの賢さを気に入り、娘のマルツェリーネの婿候補としてフィデリオを考えている。ロッコはマルツェリーネとヤキーノに、惚れてすぐ結婚してもうまく行かないぞと忠告する。《この三重唱は、歌劇「フィデリオ」ではカットされている。以降カット又は大幅に書き換えられた曲は※と表記する》【第4番-四重唱】外出から帰って来たフィデリオを加えて、それぞれが独白する甘美な四重唱がうたわれる。

《この曲は、4人が同じテーマを同じ調性とテンポで続けてうたう、一見単純な形式だが、見事な対旋律と造形美により、古代ギリシャの彫刻を思わせるベートーヴェンの真骨頂である》【第5番-アリア】つづけてロッコは、世の中は金が一番大切で、金さえあれば幸福がやってくると、世俗的な自分の人生哲学をうたう。【第6番-三重唱】そこでフィデリオはそれとなく、地下の囚人のことを聞き出そうとする。ロッコは善人らしく、2年ほど以前から、重要な政治犯が囚われていて、1ヶ月前から食事の量を徐々に減らして行くよう、所長から言い渡されているという。フィデリオは益々、それが夫だと確信を深める。フィデリオはロッコに地下牢に行かせてくれるようロッコに頼み、ロッコはフィデリオに自分の仕事を継がせ、娘のマルツェリーネと結婚させたいと願い、マルツェリーネもフィデリオと結ばれたいと願う三重唱で、一見穏やかな昔から変わらぬ日常生活をテーマとした第1幕が終わる。

《歌劇「フィデリオ」ではこの1幕と続く2幕が統合されています。フィデリオが名作ということに異論はありませんが、歌劇「レオノーレ」から失われたものを理解することは、ベートーヴェンの当初の思いと、歌劇「レオノーレ」の再評価に繋がると考えます》

第2幕

【第7番※】短い行進曲が演奏され、刑務所の中庭では衛兵が巡回している。所長のドン・ピツァロに至急報が届けられる。【第8番-コーラス付きの Aria】受け取った手紙を読んだピツァロの顔は見る見る蒼白になり、苦々しい表情を浮かべる。そこには監禁されているフロレスタンの同志で、大臣のドン・フェルナンドに密告があり、不法に監禁されている政治犯がいなかろうか、明日査察に来ると書かれていたからである。そこでピツァロは、これを機会にフロレスタンを殺してしまおうと計画する。ピツァロは部下たちに警戒を厳重にするよう命令すると【第9番-二重唱】大金をロッコに渡して、自分のいい付けどおりに、地下牢の囚人を殺せという。小心で根が善良なロッコは、とてもそんなことは出来ないと断る。それではお前は墓を掘れ、殺すのは俺がやるとピツァロが命令して、ロッコは仕方なくピツァロについて行く。つづく場面は、舞台は同じ刑務所の中庭だが、空気ががらりと変わる。【第10番-二重唱※】モーツァルトの室内楽かと思わせる優美なフルートソロ《原曲ではヴァイオリンソロ》が流れると、花束を抱えたマルツェリーネがフィデリオを従えて登場する。マルツェリーネはフィデリオへの愛を花に託し、幸せな家庭を夢見て中庭に花を撒く。純粋なマルツェリーネを騙していることになるフィデリオは浮かない顔で手伝う。【第11番-Aria※】一人になったレオノーレ(フィデリオ)は「ああ、まだ折れないで、疲れた心よ!」と、超絶技巧が要求される長大な Aria をうたう。

《歌劇「フィデリオで」「人間の屑!(Abscheulicher!)》として有名な Aria は、この曲を短縮、大幅に書き換えられたもの。レオノーレの初演が失敗して、フィデリオに改作された大きな理由は、全体の上演時間を短縮することに加え、レオノーレが当時の歌手の技量を大きく超えていたから。同様の例として、交響曲「運命」のコントラバスは当時の奏者の技量では演奏不可能だった。もちろん現代ではアマチュア奏者でさえ演奏している。200年前の器楽奏者と比較して、歌手の技量はそれほど向上していないことは興味深い》

【第12番-2幕フィナーレ】囚人たちが、久しぶりに日光浴を許され屋外に出てきて「囚人の合唱」として有名な男声四部合唱がうたわれる。そこにロッコとフィデリオやってくる。ロッコはこれ以上囚人を出すとピツァロの怒りを買うと、囚人を牢獄に戻す。ロッコはピツァロから、地下牢へのフィデリオの同伴許可を得たことを伝え、墓穴を掘る段取りを打ち合わせる。そこへマルツェリーネが駆け込んで来て、無許可で囚人たちを日光浴させたので、ピツァロがかんかんに怒っていると告げる。ピツァロが衛兵を従え現れ「急げ、弾を込めよ※」と命令する。衛兵は忠誠心と勇気を誇示する力強い合唱で答え、悪と善という対極をテーマとした第2幕が終わる。

《歌劇「フィデリオ」はベートーヴェンの真意とは逆に、第二次世界大戦中ナチスドイツの国威高揚を目的として度々上演されました。しかし戦後「フィデリオ」は、本来の姿である「自由・平和」を象徴するオペラとして評価されています。今回の日本橋オペラの「レオノーレ」日本初演にあたり、ピツァロはヒトラーを連想させる演出を採用します。ドイツ・オーストリアでは、ヒトラーを連想させる紋章や仕草さえ法律で禁止されていますが、偉大な芸術は、歴史の証言者であると同時に、預言者であるという考え、かつこの作品が作曲されてから現在まで、もっともピツァロを思わせる人物がヒトラーであることから、ご理解を得たいと思います》

第3幕

【第13番※-レチタチーヴォとアリア】真っ暗で陰惨な地下牢、その片隅に鎖に繋がれたフロレスタンが、静かにうずくまっている。彼は絶望しながらも、愛妻のレオノーレのことを思い、自分は正義の道を選んだと切々とアリアをうたい、再びその場へうずくまる。

【第14番-メロドラマと二重唱】《「メロドラマ (Melodram)」とは、ギリシア語の歌(メロス)と劇(ドラマ)の合成語で、音楽伴奏つきの芝居、つまりレチタチーヴォとオーケストラが一緒になって演奏する形式。今回の公演ではこの部分の最後の言葉を「仕事をしたら暖くなる (Im Arbeiten wird dir schon warm werden)」から、アウシュヴィッツの門に掲げられていた「仕事をしたら自由になる (Arbeit macht frei!)」に変更しています。》
ロッコとフィデリオがランタンを片手に、穴掘り道具を携えて現れる。ロッコは牢の片隅に死体を埋める、大きな穴を掘り始める。フィデリオはそれを手伝いながら、囚人が夫であるかどうかを注意深く観察する。【第15番-小三重唱】意識を取り戻したフロレスタンが水を欲する。ロッコの許しを得たフィデリオは水筒を与える。水を飲み干したフロレスタンは再び生気が蘇り、二人に感謝する。フィデリオはロッコを説得して、フロレスタンにパンを与える。【第16番※-四重唱】そこに黒いマントに身を包んだピツァロが一人地下牢に下りてくる。さっとマントを脱ぎ捨てたピツァロが、短刀をかざしてフロレスタンに近づいた瞬間「下がれ」と大声でフィデリオが飛び出して来る。そして妻である私から先に殺せと叫ぶので、ピツァロもロッコもびっくりして、この若い部下がフロレスタンの妻レオノーレであることを知る。フィデリオの手には、しっかりと拳銃が握られているので、さすがのピツァロもどうすることも出来ない。するとその緊張を破るかのように、舞台裏からラッパのファンファーレが聞こえて来る。大臣の到着を告げる信号である。レオノーレとフロレスタンは、それこそ危機一髪で助かったのである。二人は復讐の時がやって来た、愛が自由をもたらしたとうたう。愕然として口惜しがるピツァロ、ただ呆然として佇むロッコ。混乱の最後にロッコはフィデリオの銃を奪おうとしてもみ合い、一発の銃声が聞こえたところで暗転となる。

【第17番※-レチタチーヴォと二重唱】遠くから牧人の笛の音が聞こえてくる。舞台上はフロレスタン一人。彼はこれまで起こったことが理解できない。レオノーレの声は聞こえるが、姿は見えない。ついにレオノーレが現実のものとなり、フロレスタンとの愛の二重唱となる。【第18番※-フィナーレ】遠方から民衆の声が聞こえてくる。刑務所の中庭に大臣のドン・フェルナンドが民衆を引率れ現れる。ピツァロはその罪を暴かれ、手縄に掛けられ跪いている。大臣は生きていた旧知のフロレスタンを見て驚く。そしてロッコが、今までの経過を包み隠さずに報告し、レオノーレの勇敢な行ないを告げる。「フロレスタンの鎖を解くのは、高貴な女性レオノーレが相応しい」とのドン・フェルナンドの言葉で、ついにフロレスタンは自由の身となり、つづくアンダンテ・アッサイ「神よ、おお素晴らしきこの瞬間!」が感激的にうたわれる。ドン・フェルナンドはピツァロに対して終身刑を告げるが、民衆はそれでは不十分だと叫ぶ。レオノーレとフロレスタンは、ピツァロの赦しを求めるが、民衆の怒りは頂点に達し、怒った若者がピツァロを切りつけ惨殺する。フランス革命を彷彿とさせる場面が終わり、ドン・フェルナンドは、全ては神の定めと告げる。フロレスタンは今や完全に自由の身となり、貞淑で勇敢な妻レオノーレとしっかりと抱き合う。正義の勝利と崇高な夫婦愛を称える合唱が大きく盛り上がり、晴々しい気分のうちに幕が下ろされる。(あらすじはモバイル音楽事典を参考にアレンジしています)

日本橋オペラ2024

「日本初演のオペラ」シリーズ 第5回

歌劇「レオノーレ」全3幕（1805年フィデリオ原典版）日本初演

作曲／ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

世界初演／1805年11月20日アン・デア・ウィーン劇場

原作／ジャン＝ニコラ・ブイイ 台本／ヨーゼフ・フォン・ゾンライトナー

ドイツ語上演・日本語字幕付／管楽六重奏&ピアノ伴奏版（新編曲）

2024年10月13日（日）13:30開演／銀座プロッサム（中央区立中央会館）

演出・公演監督／福田祥子

指揮・編曲／佐々木 修

ピアノ／シュテファン・メラー（Stephan Möller）

フルート／泉野有香 オーボエ／土屋舞桜 クラリネット／成田美佳

ファゴット／大西巧真 ホルン／福田真子 トランペット／町田莉奈

《配役》

福田祥子／ソプラノ／レオノーレ 村上敏明／テノール／フロレスタン

ジョン・ハオ／バス／ロッコ 寺田功治／バリトン／ピツァロ

川ノ上 聡／バス／ドン・フェルナンド

森井美貴／ソプラノ／マルツェリーネ 金山京介／テノール／ヤキーノ

佐保佑弥／テノール／第一の囚人 服部聖人／バリトン／第二の囚人

《アンサンブル》

沼田真由子／ソプラノ

小川嘉世／ソプラノ

指出麻琴／ソプラノ

高橋みのり／ソプラノ

窪 瑤子／メゾソプラノ

梅野杏珠／メゾソプラノ

源本かのん／メゾソプラノ

古志祐華／メゾソプラノ

中野智貴／テノール

根岸一郎／テノール

町村 彰／テノール

種子島史時／テノール

田中 潤／バリトン

田尻大貴／バス

高橋悠貴／バス

《スタッフ》

舞台監督／菅野 将

照明・舞台／（株）フルスペック

衣裳／てっしー ヘアメイク／リュクエミール

稽古ピアノ／鈴木架哉子（字幕操作），松岡なぎさ，吉田サハラ

全席指定席 S席10,000円 A席7,000円

主催：日本橋オペラ研究会（中央区社会教育団体）

共催：一般社団法人日本橋オペラ研究会

日本橋オペラ後援企業（2024年10月1日現在）

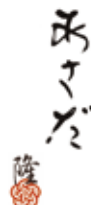
TOYOBO



Korino.I

医療法人
小池医院

Anytime
healthcare
consulting



日本橋オペラ 2024

歌劇「レオノーレ」全三幕 (日本初演)

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン



1805年 歌劇「フィデリオ」原典版

「日本初演のオペラ」シリーズ5

2024年10月13日(日) 銀座ブロッサム